

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

2012年10月1日

派遣生の基本情報

氏名：戸高広見

所属先：人文社会系研究科 欧文文化研究専攻 フランス語フランス文学専門分野

派遣時点の学年：修士1年

派遣形態：個人派遣

研究課題名：ピエール・マッコルランの作品における科学的ディストピア性

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：フランス

研究機関名(都市名)：

i) セーヌ・エ・マルヌ地域博物館(サン・シル・シュル・モラン)
La Musée des pays de Seine-et-Marne (Saint-Cyr-sur-Morin)
対応者：M. Benoit Bourdon (Médiateur culturel)

ii) フランス国立図書館(パリ)
La Bibliothèque nationale de France (Paris)

(2) 派遣期間

出国日：2012年2月6日

帰国日：2012年4月7日

総日数：62日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

本研究では、文明ないし科学技術の進歩と人間の対立からなる科学技術的ディストピアのイメージを中核に、包括的テーマとして機械と人間あるいは機械性と人間性の対立、サブテーマとして生体機械を支配し操作する物質としての麻薬のイメージ等を扱う。この一環として、機械と人間の関係にまつわる文学・思想史の文脈の中、特にディストピア的小説の系譜において、小説『恋する潜水艦』(*U-713 ou les Gentilshommes d'infortune*, 1917)を中心とした、ピエール・マッコルラン(Pierre Mac Orlan, 1882-1970)の作品を位置付ける事を試みる。この為、今回の渡航では、現時点までにおけるマッコルランの評価や、マッコルラン自身の科学技術観・文明観に関する資料を得る事を主たる目的とした。

(2) 実際に達成された成果

i)セーヌ・エ・マルヌ地域博物館(サン・シル・シュル・モラン)

常設展示及び特別展示(「ピエール・マッコルランと映画」)からの情報収集のほか、同館の厚意により、見学期間外のマッコルランの家の訪問及び写真撮影も実現した。また、博物館内資料室にて、文献調査及び許可を得た資料の写真撮影を行う事ができ、書簡や定期刊行物、タイプ原稿を含む資料の写しを入手できた。このほか、同館では日本国内において入手・アクセスが困難な関連資料(書籍・CD・DVD)を多数購入する事もできた。

ii)フランス国立図書館(パリ)

書籍のほかは主として1910年代から20年代にかけて発行された定期刊行物のマイクロフィルムを調べ、マッコルランやその作品について書かれた記事や書評、マッコルラン自身が手掛けた記事や、マッコルランの活動分野及び周辺人脈と関連する記事等を複写した。このほか、マッコルランが序文を寄せた展覧会のカタログ等も参考になった。視聴覚室ではインタビュー音声や、マッコルランが原作を手掛けた映画等を視聴する事ができた。

また、パリ滞在中は市内の古書店・古書市にて、関連資料を多数入手する事ができた。この中には、マッコルランの記事が掲載された20年代の定期刊行物も含まれる。

iii)総括

日本国内でアクセス可能なマッコルラン関連の資料は限られ、かつ分散していた為、渡航前にこの作家の性質について得られた理解は、断片的なものに留まっていた。しかし今回の調査を通じ、特にサン・シル・シュル・モランにてマッコルランという作家の多面性を概観できた事は、今後の視野を大きく広げる結果となった。

例えば、映画や写真、広告といった表現様式に対するマッコルランの関心と言及は予想以上のもので、*L'inhumaine*(1924)を始めとした映画に関わるマッコルランの活動や、広告文化・商業文化と関連した作品への関心が深まった。

また、『恋する潜水艦』の挿絵を担当したギュス・ボファの率いたグループ、*L'Araignée* の存在も興味深い発見となった。*L'Araignée* は文筆家と画家から成るグループで、メンバー同士の合作による挿絵本の発表を促していたのだが、マッコルランと親しい画家も多く在籍する同グループのサロンのカタログを開くと、20年代半ばにはジャン・コクトーや藤田嗣治もメンバーとして名を連ねている事が目を引く。また、このグループのユーモア的・幻想的傾向は『恋する潜水艦』にも共通するものである事から、同作品が持つ挿絵本としての性格や、ひいては同時代における挿絵本というジャンルの文脈にも目を向けるきっかけとなった。

(3) 今後の研究展望

今回の調査は、今後の研究にあたっての視野を大きく広げる結果となり、大別すると、近代性と表現形態に関わる二つの方向性が浮上した。

近代性に関わるものとしては、エッフェル塔や自動車、広告に消費文化、テクノロジー、血と価値など、マッコルランの文章に繰り返し登場する同時代のイメージの検討を通じ、マッコルランが感じ取り表現した近代性について考えていきたい。

表現形態に関わるものとしては、マッコルランによる書物、写真、絵画、映画などの各種表現手段にまつわる考察や、挿絵本と *L'Araignée*、映画、ラジオ、テレビといった場への関与などについ

でも、いずれ検討したいと考える。